



『すべての慰めの神』

聖書; コリント人への手紙第二1章2-6節 / 暗唱: イザヤ書41章10節

“慰めよ。慰めよ。わたしの民をとあなたがたの神は仰せられる。”

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族みなさん！新年一週間もみんな主にあってお元気で、平安の一週間でしたか。我々は年末年始、一生感謝すべき理由について御言葉を通して教えられました。そして、先週新年初めの主日礼拝の時には、人生の中でどうしてもできない危機の夜中3時ごろになる時があるかも知れませんが、その時こそ、生きておられる、すべてを見ておられる創造主なる神の真の力と主の深い慰めをいただける祝福の時である事も教えられました。

我々はまた今年も新たな希望と望みを抱いて歩める理由は主の深い慰めが我々にあるからではないでしょうか。新年礼拝を捧げながら、続けて我々にとって大切な神の慰めについて学んで行きたいと思えます。今日の御言葉を通して主イエスキリストの深い慰めが今日礼拝に集っている神の家族一人一人の心の奥底まで届けられますように主イエスキリストの尊い御名によって祝福します。アーメン！

【慰めの神様:私の民を慰めよ。】

愛するCPC信仰の家族のみなさん！この世の中で生きている人々の中で苦しみがあったくない人はいるのでしょうか。悲しみがない人がいるのでしょうか。傷や苦い根がない人がいるのでしょうか。寂しさを感じた事がない人がいるのでしょうか。そのため私はいまの時代の男女老少、老若男女、共通に聞きたがっていて必要な単語(たんご)があれば‘慰め’ということばではないかと思えます。家族ため一生懸命働いているお父さんたちが、家事や子育てや家族のため仕えるだけでなく最近仕事まで協力しながら背一杯頑張っているお母さんたちも、社会人になったばかりで一生懸命働きながら疲れている若者たちや勉強で忙しい子供たちもみんな心からの慰めを求め、願っているのではないのでしょうか。もう個人主義化になっているこの社会では、自分が悲しくて泣いても共に泣いてくれる人もいないし、苦しんでいても自分の事じゃないから無関心で満ちている環境で私たちには却って責任と成果ばかりを望んでいるため、寂しさと孤独を感じていない人々はだれもいないと思えます。

慰めの辞書的意味は“体や心の痛みや疲れが抜けられるように暖かい言葉、行動で満足させる事”あるいは、“悲しみや苦しみをなだめる事”だと書かれています。慰めは心をなでさすることです。

そして、最近新年神様が続けて私の心に与えて下さる御言葉があります。

それはイザヤ書40章1節の御言葉でした。“慰めよ。慰めよ。わたしの民を”とあなたがたの神は仰せられる。”

つまり、“わたしの民を慰めよ”という御言葉でした。これは神様の命令であり、お願いです。神様は慰めの神様です。

コリント人への手紙第二 1章3節を見て下さい。

“私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。”

使徒パウロはすべての艱難において神様からの慰めを経験したと告白しました。神様からの慰めを受けながら、同時に艱難の中にいる人々を慰める使命を悟られました。

コリント人への手紙第二 1章4節をみてください。

“神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。”

「どのような苦しみの中に」というのは人間が経験するあらゆる苦難、苦しみ、なやみ、問題、やまい、貧しさなどを言うでしょう。

【本文の内容:旅人であるヤコブを慰めてくださる神様】

今日は‘さびしい旅人のようなわれらの人生をを慰めてくださる神様’について一緒に考えてみたいと思えます。

聖書の中で出ている約2930人ぐらいの人物たちの中で体系的に険しい旅人の人生を送った人がいました。旧約のヤコブという人物です。創世記47章9節を読んで見ますと、ヤコブの自分の人生を振り返って見ながらこう告白しています。

“ヤコブはパロに答えた。「私のたどった年月は百三十年です。私の齢の年月はわずかで、ふしあわせで、私の先祖のたどった齢の年月には及びません。」(And Jacob said to Pharaoh, “The years of my pilgrimage are a hundred and thirty. My years have been few and difficult, and they do not equal the years of the pilgrimage of my fathers.)” このヤコブと信仰の人物の旅路はさびしくて大変な旅人の人生として歩まれた人である事が分かります。

それでは、今日は特に創世記28章のヤコブが旅人の人生として一番大変で、寂しかった時に神様がどのように彼を慰めて下さったのか調べて見ましょう。

創世記28章の内容はヤコブは愛する母であるリベカと家族をはなれ、伯父(おじ)であるラバンの家に向う途中、さびしい夜を向います。そばにはだれもないさびしい旅路(たびじ)でした。手に持っている物もなく、休むところもなく、石を取って枕とし、天をふとんにして路宿をしようとしています。創世記 28章10-11節はこのように記録しています。

“ヤコブはベエル・シェバを立て、ハランへと旅立った。ある所に着いたとき、ちょうど日が沈んだので、そこで一夜を明かすことにした。彼はその所の石の一つを取り、それを枕にして、その場所で横になった。” その時、神様はヤコブに尋ねて

くださいます。そして彼を慰めてくださいました。神様は今日もさびしい旅人の道を歩んでいる我々にもこのようにたずねて来られます。そして、我々を慰めてくださろうとしています。

いったい、何が起こったのでしょうか。ヤコブはハランに向って旅を始めたのでしょうか。なぜ一人でしょうか。なぜさびしく石の枕で寝なければならないのでしょうか。これは彼が望んだ道ではありません。彼はただ、祝福を願っていました。ヤコブは兄であるエサウが受けるべき祝福の祈りを盗んでしまいました。母であるリベカのえこひいきのためヤコブは兄の祝福を横取りしてしまいました。それを知ったエサウは弟を殺そうと決心します。

創世記 27章41節をみてください。

“エサウは、父がヤコブを祝福したあの祝福のことでヤコブを恨んだ。それでエサウは心の中で言った。「父の喪の日も近づいている。そのとき、弟ヤコブを殺してやろう。」”

愛する信仰の家族のみなさん! どれほど恐ろしいことでしょうか。

兄弟が自分の兄弟を殺してやると心に決めたのです。人の憎しみはこれほど恐ろしいのです。このエサウの気持ちを分かった母リベカはヤコブを呼んでハランでしばらく身を隠すようにと進めます。その内容が**創世記 27:42-45節**です。

ヤコブが旅人になったのは一瞬のことでした。心に何の準備もできず、旅人になってしまったのです。愛する親と人々と生き別れをされたのです。一度も会ったことも、行ったこともないハランという遠いところ、伯父であるラバンの家に行くために一人で旅立ったのです。ヤコブはこのようにして旅人となりました。私たちもある日突然、一人ぼっちになったようなさびしい気持ちになったことはありませんか。実は我々もいつかは突然と感じるほど、思わずに愛する周りの家族は一人、二人離れ、一人で旅人のように人生を歩んでいる時が来るのではないのでしょうか。残念ながら、この世では愛する家族とはいつかみんな離別します。そして、みんな歩んでいる今の人生もみんな初めての経験なので、どうすればいいのか迷ったり、慣れていくのに背一杯の時もあるでしょう。

【旅人である我々の人生を慰めてくださる神様】

愛する信仰の家族のみなさん! ヤコブだけがさびしい旅人でしょうか。違います。我々もある意味でさびしい旅人の道を歩んでいます。いつか愛する人々が我々から離れ、一人ぼっちに人生を歩んでいるような寂しさを感じる時があると思います。聖書は我々がこの地上において旅人であり、寄留者であると言っています。ヘブル人への手紙11章13節をみてください。

“これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。”

使徒ペテロが散らされている旅人たちに手紙を送りました。その旅人たちは神様を信じていた小アジアの教会の信仰の家族でした。

“イエス・キリストの使徒ペテロから、ポント、ガラテヤ、カパドキヤ、アジヤ、ビテニヤに散って寄留している、選ばれた人々、すなわち、2 父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。どうか、恵みと平安が、あなたがたの上にありますように豊かにされますように。”(ペテロの手紙第一1:1-2)

神様は旅人の状態や気持ちをよく知っておられます。そういうわけでさびしい旅人を訪ねて来て慰めてくださるのです。

そしたら、神様の慰めを必要としている旅人はどんな状態人なでしょうか。

何よりも、旅人はさびしいです。旅人はさきに何が起こるか分からないため恐れます。ヤコブもいまあまりにもさびしく、これからなにが起こるか分からず恐れています。兄であるエサウがいつおいかけてきて自分を殺すか分かりません。ヤコブは兄であるエサウをだれよりもよく知っています。いまヤコブは彼の兄であるエサウから逃げていく状況ではありませんか。愛するみなさん! 我々を力づけてくれるのも人ですが、我々の力をぬいてしまうのも人です。我々を勇気付けてくれるのも人ですが、我々を脅かすのも人です。ですから人々はいつも人を警戒しようとしています。疑い深く、信じようとしません。旅人はまた貧しいです。ヤコブはどれだけ急いで逃げてきたのか、自分の手には杖しかないと告白します。**(創世記32:10)** ひもじかったでしょう。それだけではなく、旅人は自信もなく、不安です。ですから、旅人の心はまるで割れやすい器のようです。傷つきやすい肌(はだ)のようです。一言の言葉と愛に慰められますが、同時に一言の言葉と目つきにも傷ついてしまいます。ですから、旅人に接する時、注意深くなければなりません。神様は旅人の心をご存知です。その心を理解しておられます。

〈神様が慰めてくださる方法〉

神様はヤコブが石の枕で寝ているときたずねて来てくださいました。真っ暗で、不安で寒くて、危ない夜に神様は一人ぼっちなヤコブを慰めるために来られました。神様はどうやってヤコブを慰めたのでしょうか。

1.神は望みと希望によって慰めを与えて下さいました。(創世記28:12)

慰めとは消極的には落胆の中にいる人の心をなだめることです。しかし、積極的にはなだめることを越え、希望を与えることです。神様の慰めは希望を与える慰めです。神様は夢を通してヤコブに希望を与えて下さいました。そのため彼が見た夢はとっっても大切な夢でした。12節をみてください。

“そのうちに、彼は夢を見た。見よ。一つのはしがが地に向けて立てられている。その頂は天に届き、見よ、神の使いたち

が、そのはしごを上り下りしている。”

夢の中には一つのはしごがあって、そのいただきは天に届けています。御使いたちがそのはしごを上り下りしています。つまり、このはしごは地と天をつなぐはしごです。神様はこの夢のまぼろしをとおして一人ぼっちのヤコブに決して、一人ぼっちにさせないで、神様がともにおられ、天からの祝福を見せながら慰めてくださっています。ヤコブがみた夢をもっと黙想してみると、ヤコブの夢がもっている大切な意味が分かってきます。

天に上るためには天と地をつなぐはしごが必要であることです。そのはしごを上り下りする使いたちがいて神様の働きをしています。ところが、使いたちは翼を持っていたのにもかかわらず、飛ばないで、一つ一つ階段を上っています。下がる時も同じです。

我々の霊性、信仰の訓練もこのようであることを覚える必要があります。はしごの階段を一つ一つ上るようにそのような過程を通らなければならないことです。神様が我々を導く時も一つの階段ずつ導くということです。旅人の旅路において警戒すべきことはあせることです。旅人の道は短距離レースではありません。まるでマラソン競争のようです。ですから、あせると危ないです。あせて成功し、あせて金持ちになろうとし、いそいで勝とうとしようとすることはとっても危険です。はしごのまぼろしは我々に大切な教訓を与えます。天に届くためにははしごが必要とされることと、そのはしごの階段を一つずつ上らなければならないことです。

大切なのはイエス様もそのまぼろしを言われたのです。

ヨハネの福音書1章51節には、“そして言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたはいまに見ます。」”。ところが、イエス様の御言葉で注目する点は、イエス様が言われたヤコブの夢のまぼろしとは違う点があります。つまり、イエス様が言われた御言葉にははしごがなく、はしごの代わりに人の子(イエス様)がいます。神の御使いたちが人の子の上を上り下りしています。どんな意味でしょうか。

地と天をつないでくれるのははしごではなくイエス様であることを教えて下さっているのです。

もうちょっと聖書全体の流れで理解すると、天の神様と地をつなぐ旧約のはしごのようなものが新約ではイエスキリストの十字架であることがわかります。つまり、新約の時代では十字架にくぎつけられ死なれたイエス様が我々のはしごとなれるということです。

さびしい旅人に必要なことは希望の夢です。この地上に生きている間、かなえられる夢とともに永遠なる天国に対する夢が必要です。天をみあげる人はこれ以上この地上のことに執着したり、恐れる必要がありません。旅人である我々が受ける真の慰めはイエスキリストのみにより可能であることを忘れないで下さい。

2.神様は約束の御言葉をとおして慰めてくださいます。

不安で、さびしい旅人に慰めとなることは確実な約束と祝福の言葉でしょう。神様はヤコブにあらわれて夢よりもっと確実に、正確な方法として慰めて下さいました。すなわち、神様は次のような約束と祝福の御言葉で彼を慰めて下さいました。今日の本文13節から15節まで1節づつ見て見ましょう。

“そして、見よ。主が彼のかたわらに立っておられた。そして仰せられた。「わたしはあなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える。」(創世記28:13)

“あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西、東、北、南へと広がり、地上のすべての民族は、あなたとあなたの子孫によって祝福される。”(創世記28:14)

“見よ。わたしはあなたとともにあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ戻そう。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。”(創世記28:15)

いまヤコブは一人ぼっちにいます。自分を支えてくれる家族もなく、杖一本しかない、未来が見えない不安と恐れをいただいています。そんなヤコブに神様はたずねてきて、具体的に地の祝福を、子孫の祝福を、そして、どこにいてもヤコブを離れないで、ともにおられることを約束し、ヤコブはこの神様からの約束と祝福の御言葉を堅くつかみしました。

ヤコブは神様がくださったこの約束と祝福の御言葉を20年の間も、つかんで生きます。後に彼はこのように告白します。

“そうしてヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。かつて私に『あなたの生まれ故郷に帰れ。わたしはあなたをしあわせにする。』と仰せられた主よ。」(創世記32:9)

愛する信仰の家族のみなさん!

神様の御言葉は力の御言葉です。神様の御言葉は我々を慰め、いやします。神様の御言葉は軟弱な旅人に力を与え、強めて下さいます。倒れようとしている時、我々を支えて下さいます。

“イエスは答えて言われた。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」と書いてある。」(マタイの福音書4:4)

我々は意識しているか、いないか、ある言葉をつかまれて生きています。その言葉をくりかえして考え、その言葉にしたがって話し、その言葉によって行動します。今日私はどんな言葉をつかんで生きているのか、ふりかえてみましょう。

みなさんは神様のどんな約束の言葉をつかんでいますか。

神様は約束の言葉をとおして旅人であるヤコブを慰めてくださいました。彼に夢を与え、約束と祝福の御言葉でこの世が与えられないまことの慰めを与えて下さいました。これほど大きな慰めがあるでしょうか。

神様は今日も旅路を歩んでいる我々にこのような慰めと約束の御言葉を与えてくださっています。

“恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。”(イザヤ書41:10)

メッセージを終わらせます。

ところが、使徒パウロが、ヤコブが経験した艱難とは比較すらできないほど艱難を受けられた方がいます。だれでしょうか。そうです。我々の主イエスキリストです。旧約のイザヤ預言者は来られるイエス様の姿をこのように記録しています。

“彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。”(イザヤ書53:3)

だれよりもイエス様は蔑まれました。悲しみを経験され、苦しみをたくさん受けました。イエス様はこの地上にいる間、貧しかったし、苦しまれました。だからこそ、イエス様は人々の悲しみや苦しみをよく知っておられる方です。“病”とは病気による苦しみを意味します。ですからイエス様は苦しみの中にある人の気持ちをよく知っておられます。そして、彼らを慰めることができるお方です。

愛する信仰の家族のみなさん！今も自分だけが傷を持っていると考え込まないで下さい。旅路の人生を歩んでいる人はみんな傷を持って生きています。大事なはその傷自体ではなく、自分の傷に対する反応によって結構人生が左右される時が多いのではないのでしょうか。その時イエスキリストが受けた傷を黙想してみてください。神であられるイエスキリストが人間の体を持って来られたので、イエス様も貧しさの傷もあったし、信頼していた人たちから裏切られた傷もあり、捨てられた傷や、誤解の傷、無視された傷、一番大切なことを奪われた傷なども全部持つておられ、知っておられますから、だれよりもみなさんの傷に対して慰める事ができる神様です。

旅人の道はさびしいです。一人ですべてをやりこなすには大変で、苦しいです。

ですからともに歩まなければなりません。だれよりも神様と一緒に歩まなければなりません。ドイツの総理であったアンゲラメルケル(Angela DorotheaMerkel)はダボスフォーラム(Davos Forum)でアフリカ支援のための国際社会の協力を強調しながらつぎのような有名な言葉を残しました。

“早く行きたいなら、一人で行ってもかまいません。しかし遠く行きたいなら、ともに行かなければなりません。”

短い言葉ですが、考えさせられる言葉です。

我々が歩むべき道は近い道ではありません。遠い道です。天国までいく道です。ですから、一人で行ってはいけません。一緒に同行してくれる同伴者が必要です。あなたを慰め、勇気を与え、希望を与え、約束と祝福を与える同伴者です。だれでしょうか。そうです。我々の最高の同伴者はイエスキリストです。今日我々は主イエスキリストと同行していますか。あせらないで、主の歩調に合わせて神様がくださる希望、約束と祝福の御言葉をつかんで、もう一度新年2014年も人生の旅路に大胆に出かけられるクリスチャンプレイズチャーチのみんなとなりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！